

筑後川の水神祠群に着目した人々の暮らしと川との歴史的関係性の読み解き

九州大学大学院 学生会員 ○平野哲也

正会員 榎本碧

正会員 樋口明彦

1. 研究の背景と目的

筑後川は九州最大の一級河川であり、九州北部における治水や水利用の歴史の中で重要な役割を担ってきた。そのため古くから人々の生活、文化と深い結びつきを持つ。筑後川流域に現存する利水・治水施設は今日まで筑後川と人との関わりの歴史を伝える大切な遺産であるが、船着場や水汲み場といった人々の暮らしと川の歴史的な関係性を伝えるものの多くは生活の変化に伴って失われてしまっており、今日、過去の河川空間を理解するための手掛かりは少ない状況にある。

一方、筑後川沿川には多くの水神祠が祀られている。これらの水神祠は、人々の水に対する恩恵と恐怖が神格化し、諸神仏に仮託して信仰という形をとって引き継がれてきたと考えられる。

本研究では、筑後川沿川に立地する水神祠の立地要因の考察を行うことにより、人々の暮らしと川との歴史的関係性の読み解きを行う。

2. 研究の方法

研究対象は、筑後川沿川に分布する水神祠とする。水神祠とは、祭神として水に纏わる神を祀っている祠や石のことで、写真-1 のようなものを対象とする。

本研究ではまず始めに現地調査を行い、水神祠の立地調査とヒアリング調査を行った。立地調査は、筑後川沿川に立地する水神祠を現地で目視確認し、水神祠の立地場所、刻印、祭神、祭祀の形式を記録した。ヒアリング調査は、現地調査で確認した水神祠の周辺に住む住民に対し、主に管理は誰が行っているか、水神祠が何故その場所に祭られたのか（以下、立地要因）、について聞き取り調査を実施した。

さらに、ヒアリング調査から全ての水神祠の立地要因を明らかにすることができなかったため、追加調査を行い、水神祠の立地要因を明らかにするため次のよ

うな分析を行った。

まず、現地調査により得られた水神祠の立地を平成14（2002）年に国土地理院が作成した2万5千分の1の地形図にプロットし、水神祠分布図を作成した。次に、(1) 集落、(2) 渡し、(3) 川港 / 筏場 / 筏宿、(4) 瀬 / 淵、(5) 築堤 / 掘削、(6) 破堤 / 決壊などの災害の被害箇所、の位置を地図上にプロットし、それぞれを水神祠分布図と重ね合わせ、位置関係を確認した。これらの位置関係から水神祠の立地要因について考察を行った。渡しや瀬、淵の位置については、現存する碑の位置や弘化3（1846）年の筑後川絵図から読み取った。旧河道は明治33（1900）年の5万分の1の地形図の河道を図示した。これは大正10（1921）年水害の結果として行われた第三次河道改修前の河道を示しており、弘化3（1846）年の筑後川絵図に描かれた河道に近似すると推測できるためである。また破堤箇所は昭和28（1953）年の水害、決壊箇所は明治22（1889）年の水害の被害を「水害地域に関する調査研究第二部」を参考にプロットした。

3. 調査結果

立地調査により、筑後川沿川に91箇所の水神祠の存在が確認できた。また、立地調査およびヒアリング調査から、図-1～図-4に示すように、水神祠が建設



写真-1 祠形式の水神祠（左）と石形式の水神祠（右）

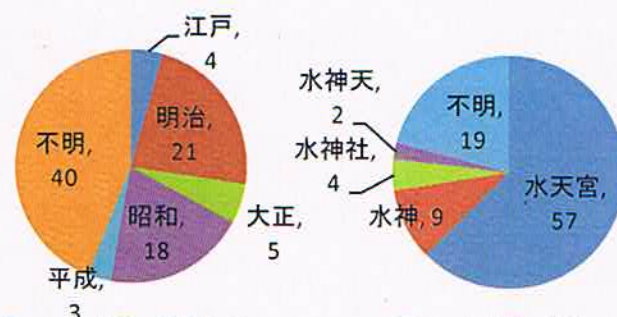


図-1 水神祠の建設年代

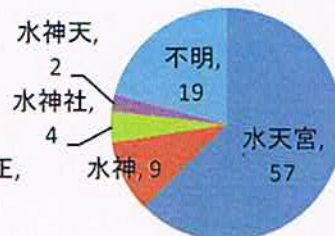


図-2 水神祠の祭神

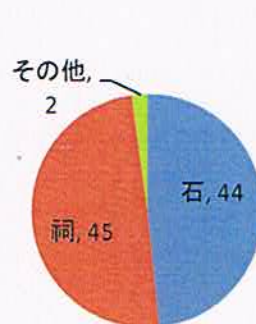


図-3 水神祠の祭祀

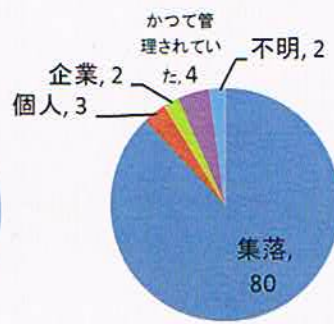


図-4 水神祠の管理者

された年代、祭神、祭祀、管理者が明らかになった。

水神祠の分布をみると、下流域にはほとんど立地していなかった。この立地していなかった地域は筑後大堰が建設される以前の感潮区間であることが影響していると考えられ、このことから水神祠の立地要因が河川の利用や水害等と密接に関係していることが考えられる。また、特に上流の日田周辺に密集して立地していた。このことから、地域によって水神祠の分布に違いがあることが明らかとなった。水神祠の祭神は、57箇所水天宮が祀られており、筑後川では水天宮信仰が広まっていることが確認できる。これは、久留米に水天宮の総本山が位置していることが関係すると考えられる。祭祀の形式をみると、石で祀られているものが44箇所、祠で祀られているものが45箇所あり、石で祀られている水神祠が上流に多く分布していることが確認された。このことより、地域により祭祀の形式に違いが確認された。

4. 水神祠の立地要因に関する分析

ここでは水神祠の立地要因の分析結果の一例として、水神祠と集落、渡し場、破堤、決壊箇所、旧河道との関係についての分析結果を示す。図-5に水神祠と集落、渡し場、破堤、決壊箇所、旧河道との位置関係を図示した。この図は調査対象エリアである筑後川沿川の両筑橋から神代橋までを抜粋した。

図-5より、ほとんどの水神祠は集落の川側に立地していることが確認でき、水神祠の周辺にはそれを管理する集落が立地することが考えられる。

渡し場は弘化3年の筑後川絵図より22箇所確認でき、またそのうち11箇所の渡しの周辺に水神祠が立地していた。両岸に水神祠が確認できた場所が2箇所、片岸のみが9箇所であった。両岸に水神祠が認められる場所があることから、片岸のみの場合も過去に両岸に水神祠が祀られていた可能性が推測できる。そこで、片岸に水神祠がある場所の対岸の河道変化を確認すると、9箇所のうち7箇所で河道に変化があったことが確認された。このことから、水神祠が河道変化で移設された可能性が考えられる。

破堤、決壊箇所は20箇所確認でき、そのうちの7箇所で水神祠が周辺に立地していることが確認できた。このことから水神祠の立地と水害の関係性が考えられる。

このような分析を行った結果、91箇所のうち56箇所の水神祠が、渡しなど水利用のあった場所や、洪水などの災害があった場所の近くに位置することを確認した。

5. 結論

本研究では、水神祠が渡しの近くや、水害時の決壊箇所に設置されてきた可能性を指摘した。以上のこと



図-5 調査により水神祠と集落・渡し場・破堤箇所・旧河道の位置関係図

から、水神祠の立地が川と人の暮らしとの関係を読み解く手段になると考えられる。今後は追加調査を行い、水神祠の立地要因について詳細な分析が必要である。